

ほう か こ 放課後ゆめトリップ!

あく む だい さく せん
悪夢からのレスキュー大作戦

う め の こ ふ き
梅野小吹・作

と い な な
問七・絵



アルファポリスきずな文庫



プロローグ 006

第一章 夢のはじまり

第一話 変なコウモリを追いかけて 008

第二話 ここって天国!? 017

第三話 きんきゆうじたい、発生! 028

第二章 灰色の森と女王さま

第四話 ハラペコの仲間! 048

第五話 わすれない約束 065

第六話 ヘンテコ森のいきものたち 078

第七話 夢の中のヒーロー 102

第八話 まさかあなたが女王さま!? 118

第三章 森の仲間たちと夢の終点

第九話 いっちだんけつ! 133

第十話 大作戦、かいし! 149

第十一話 夢のおわり 166

エピローグ 191

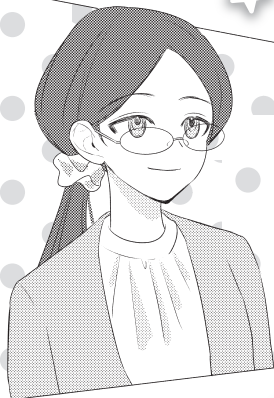


ひと しあわ した
人の幸せを食べてしまう、コウ
モリに似た動物。
ゆめ なか
夢の中に落ちこちたユニコたち
をおそう。

フコーモリン

女王様

フコーモリンに操られてしまっ
たけどその正体は……



白川先生

ユニコの学校の担任の先生。
怒ると怖いけれど、いつも生徒
のことを一番を考えてくれる。

車掌さん

夢と現実をつなぐ夢見列
車の車掌。
四匹の羊の列車と一緒に
虹の線路を通って夢をわ
たっていく。

Character

ペンペン

ハラペコーモリンとい
う、コウモリに似た動
物。
ユニコを夢の世界に導
いたのんびり屋さん
で、最近ではユニコの頭
の上にお気に入り。



ユニコ
／小日向優丹子

猪突猛進気味な中学一年生。
放課後、作文を書くために居
残りしていると白いコウモリ
を見つけた。あとを追いか
けるとそこは夢の中で……？

クワム
／玖波玄尊

クールそうに見えて、本当は
優しいユニコのクラスメイト。
ユニコが夢の中に落ちこち
るとなぜか夢の中にいて……？
実は、みんなの夢の守り人。

プロローグ

なんだかたのしい夢を見た。

そう思いながら目覚めた朝は、ちよつぱり気分がいいけれど、ほんの少しさびしい。

幸せで面白い夢だったのに、起きるとあんまり覚えていなくて、あーあ、もう少しあそこにいたかったのになあ、なんて、ビミョウなキモチになったりする。

夢の中ではなんでもありだ。

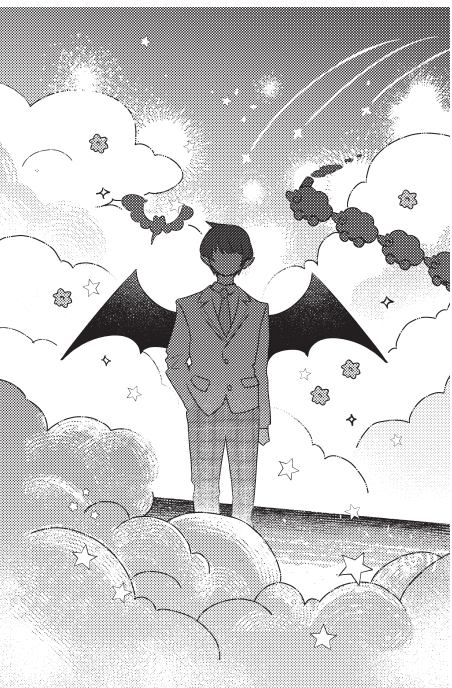
お姫さま。王子さま。まほうのようせい。大かいじゅう。

想像するだけで、どんなものにもなれてしまう。

——あー、すつごく、面白かった！

今日、そう思えるぐらいたのしい夢を見ていたきみは、おだやかなねむりの中で、フシギなヒツジの列車や、ヘンテコなコウモリを見かけなかっただろうか。

もし、そんな夢を見ていたとしたら、きみも……
みんなの夢を守っている『あの人』に、助けられたのかもしれないよ。



第一章 夢のはじまり

第一話 変なコウモリを追いかけて

「さて、小日向さん。今日はどうして呼び出されたか、わかるかしら？」

ざわざわと、先生たちの話し声が耳にとどき、コーヒーマシンの香りが鼻の先をくすぐる職員室。

そして、担任の先生と向かい合っているわたし——小日向優丹子は、目を泳がせていた。

どんな言いわけをしようか。なんと行ってごまかそうか。

ふわふわとした天然パーマの頭でなんども考え、シミュレーションをする。

「小日向さん」

しかし、担任の白川先生がもう一度わたしの名前を呼んだとたん、シミュレーションした言いわけがすべてどこかへ飛んでいった。

わたしはかんねんして、正直にはくじようする。

「宿題の作文を、書いてこなかったからです……」

「その通り」

うなずいた先生は、メガネのレンズを光らせて、笑顔のまま、お説教を始めた。

「今日の国語の時間までにやってきなさいと言っていたわよね？ クラスであなただけですよ、まだ提出していないのは。どうして書いてこなかったの？」

「……すっかりわすれていました……」

「先週も宿題をわすれたでしょう？ その前の週も、未提出のプリントがあつたわね。知っていますか、小日向さん。『仏の顔も三度まで』なんです。今日という今日は、その作文を書き終えるまで家には帰しません」

「えー!!」

ガーン、とショックを受ける。先生はうでを組み、「イヤならはやく終わらせなさい」と言っ、わたしに作文用紙をわたした。

「はあい……」

しふしぶ返事をする。

今回の作文のテーマは、『わたしの夢』。

むむ、とまゆの間にシワを寄せ、用紙のマス目とにらめっこ。

「夢って言われても、わたし、将来の夢がぜんぜん決まっていなくて……」

「むずかしく考えなくていいのよ。夢なんだから、どんなことを書いても自由なもの」

「先生は、学校の先生になることが夢だったの？」

「もちろん。でも、小さいころは、童話のプリンスになるのが夢だったわね」

先生はほほえむ。「とにかく、なんでもいいから書いてきなさい」と続けた白川先生は、メ
ガネの下から目がしらをつまむように指で押さえて、けわしい顔をした。

ハアー、と深いため息まで聞こえてくる。

ものすごく怒っているのかもしれないと思つて、ちよつとドキドキした。

「……先生、だいじょうぶ？ 怒ってるんですか？」

「ううん、疲れてるだけよ。最近あんまり、よくねむれなくて」

「えー！ ダメですよ！ おうちに帰つて、はやくねないと！」

「だれかさんがはやく作文を終わらせてくれれば、すぐに帰れるんだけどね」

じとり。先生の目がメガネの向こうからわたしを見て、急に気まづくなった。

ふわふわの髪の毛で顔をかくし、回れ右をして、ぬき足、さし足、しのび足。「失礼シマシ

タ」とロボットみたいにカチコチのあいさつをして、職員室を出た。

（やばい。先生、だらしないわたしへの怒りで、ねむれなくなってるのかも。急いで作文を書かないと、大変だ）

あせりながら、小走りをする。

はやく教室へもどろうとしてみると、とつぜん、わたしの目の前を小さなカゲが横切った。

「ん？」

——バサバサッ。

なにかが羽ばたく音がする。顔を上げて、そばにはなにもいない。

「あれ？ いま、なにか……」

——どんつ。

その時、前から走ってきただれかとぶつかってしまった。「わ！」と声がこぼれて、体がよろめく。けれど、すぐにうでをつかまれた。

相手もぶつかったことにおどろいたのか、あせった顔をして謝る。

「わ、悪い。だいじょうぶか？ ふわふわ頭」

わたしのことを『ふわふわ頭』と呼んだのは、よく知っている人だった。

玖波玄夢くん——今年から同じクラスになった男の子。あまり話したことはないけれど、かつこよくて、運動ができて、成績もいいから、一部の女子から人気だということは知っている。クールでミスティアスなフンイキだけど、性格はやさしくて王子さまみたいだって、友だちがみんな言っていた。

そんな彼に支えられてしまったわたし。たしかにかっこいいかも、となつとくする。

「うん、だいじようぶ！ ちゃんと前見てなくて、ごめんね。ありがと！」

「いや、オレの方からぶつかったし……」

「わたしもぼーつとしてたからお互いさまだよく！ クロムくんの手がつかまえてくれて助かった！ ナイスキャッチだったね！」

明るい笑顔でフォローした。その間、クロムくんはキョロキョロとまわりを見て、なにかを探しているようだった。

「なにか探してるの？」

たずねると、クロムくんは「いや……」とビミョウな顔でほほえんだ。それでもやつぱり、なにかを探しているように見える。

フシギに思ってまばたきしているうちに、「ごめん、オレ、もう行かなきゃ」とクロムくん

がそばをはなれた。「うん」とうなずいて見送ったけれど、去っていく背中も、なんだか急いでいるみたいだった。



教室にもどって、作文の宿題にとらめっこ。

でも、用紙も、頭の中も真っ白で、タイトルすらも決まらない。

しばらくして、「あー、ダメだあ！」と机につつぶした。そして、さつきすれちがったクロムくんのことを考えた。

（クロムくん、あんなに急いで、どこに行っただろう？ もう放課後なのに、カバンも持っていないかったし）

考えたその時、ろうかの奥を、白いなかを通りすぎる。

ハトかと思っただけで、それにしてもいぶん小さかった。

「んっ？」

つい気になって、目をこらす。白いなかはろうかの天井をぐるぐると飛び回っている。

よく見ると、それは、白いふわふわの毛におおわれた、一匹のクウモリだった。

「ええっ!?　なんでこんなところに!」

目がまんまるになった。大きな声も出た。普通のクウモリなら見たことあるけれど、白いクウモリなんてはじめて見た。教室を出たわたしの目は、めずらしいクウモリにクギツケになる。「迷い込んだじゃったのかな」

先生に言うべきか悩んでいると、クウモリがろうかを曲がる。

「あつ、見失っちゃう!」

わたしもすぐに追いかけた。

クウモリはパタパタと飛び、階段をおりて、さらに奥へ飛んでいく。

どこまで行くんだらう?

ついていくと、白いクウモリは、とつぜんカベをすり抜けた。

「あれ!?　カベの向こうに行っちゃった!?　どうやって?」

なにが起きたのかわからず、おどろいて足を止める。クウモリがすり抜けていったカベの前に立ちつくし、ぺたぺたとさわってみるけれど、どうやっても通り抜けられそうにない。

でも、いま、たしかに、クウモリはカベをすり抜けていった。

(なんで、あんなことができたの?　もしかして、オバケ!?)

見たことのない光景を見てしまい、頭の中にいろんな感情が生まれる。

いちばん強く感じていたのは、好奇心だった。

(オバケ、はじめて見た!!)

怖いなんて思う前に、わくわくと胸が高鳴っていく。

わたしは作文のことなんかすっかりわすれて、オバケクウモリがすり抜けていったカベの向こうにつながるドアを開けた。

そこはなんだか暗い教室で、とても静かだ。

(うわあ、真っ暗……。ここ、ずっと使われていない教室だ。カーテンが閉まっている)

クウモリが侵入したのは、誰もいない空き教室。先生も生徒もやってこないところだった。ドキドキしながら中の様子をうかがってみる。

カーテンが閉まっているせいで、すごく暗くて、まるでオバケやしきみたい。

パタパタとなにかの音が聞こえてくるけれど、暗くてよく見えない。

じっと目をこらしてみる。すると、机の向こうに、だれかの足が見えた。

(だれかいいる?　もしかして、たおれてるのかな!?)

心配しんぱいになって、そつと教室きょうしつの中なかに入はいった。近ちかづく、そこにはやつぱり人ひとの姿すがたがあつた。カベにもたれかかり、目めを閉とじてねむつていたのは、クロムくんだった。

「クロムくん!」

思わず大きな声こえが出る。だが、クロムくんは起きなかつた。

「どうして、ここでねてるの!? こんなところでねちやだめだよ! 起きて!」

「……」

「へ、返事へんじがない! ハッ! もしかして、さっきのオバケコウモリに、たましいを食たべられちやつたの!」

わたしは大あわてで、クロムくんが生いきているかたしかめようと、彼かれの手てを取とった。

そのしゅんかん、なにかに強つよく引ひつぱられ、なにもない空間くうかんに投げ出なされる。

「へ?」

それは、本ほん当とうにいつしゅんのできごとだった。

ジェットコースターに乗のつて、てつぺんから落おつこちる時ときみたい、ふわつとした感かん覚かくを、おなかのあたりに感かんじた。

髪かみがぶわりと広ひろがる。バケツの底そこが抜ぬけたみたいに、ぽつかりあいた穴あなの中なかへ、真まっ逆さかさま

に落おちていく。

「うわーっ!」

こうしてわたしは、クロムくんの夢ゆめの中なかに、引ひきずり込こまれた。

第二話 ころころ天国!?

「わああーっ!」

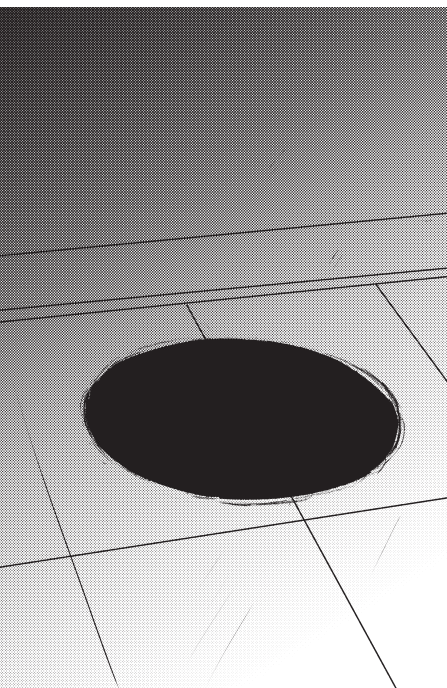
おなかの底そこから声こえが出でた。

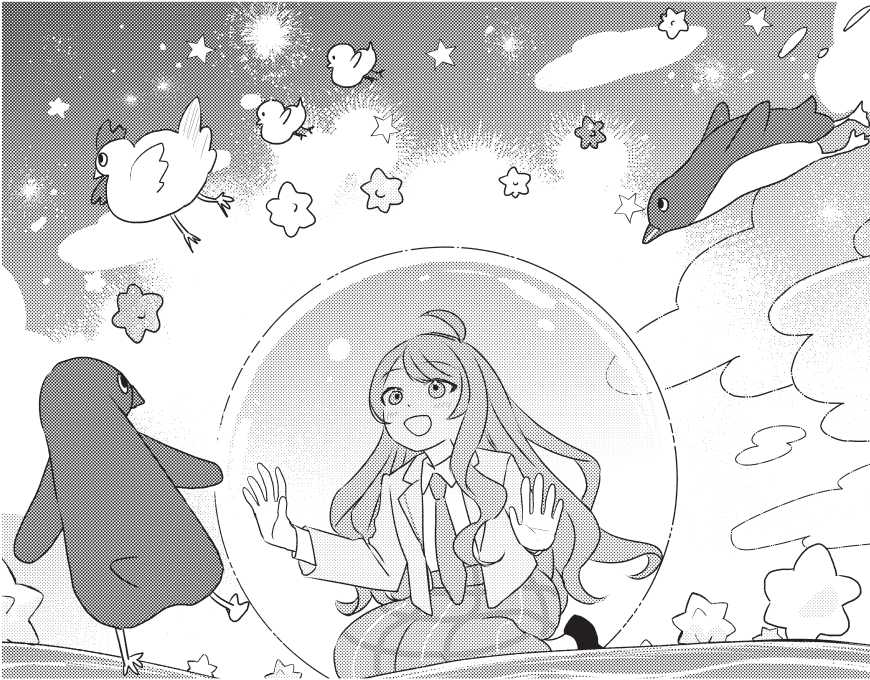
さっきまで教室きょうしつにいたのに、気きがつけば、床ゆかも窓まどもぜんぶなくなつていた。

いま、わたしがいるのは空そらの上うへ。でも、

わたしの知しっている空そらとはぜんぜんちがう。

ピンク、むらさき、黄色きいろ、水色みずいろ……まるで水彩絵すいさいえの具ぐのパレットをひっくり返かえした





みたいに、たくさん色が散らばる空だ。

「あ、明るけれど、太陽がどこにもない。」

星がきらめいているのに、月もない。

そもそも、そんな景色をながめているヨユウもない。

「お、落ち、落ちるうう!!」

ものすごいスピードで空から落っこちていくわたし。

とにかく涙目でさげんでいた。

すると、わたしの下にあった大きなシャボン玉が、ポヨンとわたしを包み込む。

「ふぎや!」

わたしはシャボン玉にキャッチされた。

ふかふか、今度は浮かぶように、ゆつくりと落ちていく。

「はあつ、はあつ。助かった……」

地面にぶつからずにすんで、わたしはホッとする。

しかし、フシギな世界に來てしまったギモンは増すばかり。

ここはどこ?

いつたいなに?

さつきまで学校にいたのに。

クロムくんは、だいじょうぶなのかな?

トウメイなシャボン玉の中でいろんなことを考えながら、キヨロキヨロとまわりを見わたす。

だけど、いくら探しても、学校は見えないし、クロムくんの姿もない。

その代わりに、コンペイトウの形をしたカラフルな流れ星が、わたしのそばをキラキラと流れていった。

続けて、空飛ぶニワトリの親子や、雲の上をすべるペンギンたちともすれちがう。

ものすごく変だ。

だって、ニワトリもペンギンも、空を飛べる鳥じゃない。

「な、なにこれ、どうなってるの？　まるで絵本の中みたい」

おかしい景色をながめていると、近くでパタパタと音がする。

顔を上げたところには、見覚えのある白いふわふわの毛におおわれたコウモリがいた。

「ああー！」

わたしは思わず大きな声を出す。まゆをつり上げ、コウモリを指さした。

コウモリは、わたしのまわりを飛びながら、キョトンとしている。

白いコウモリ……いや、オバケコウモリ！　わたしが変な場所にきてしまったのは、絶対にこのコウモリのしわざだ！

「ちよつと！　そのオバケ！　あなたでしょ、わたしを変なところに連れてきたのは！」

「キュピ？」

「かわいい声を出してもムダだよ！　だまされないんだから……あれ？　でも、あなたつて、オバケだよ。ってことは、わたし、死んじゃったの!?　ここって天国!？」

「ピ。ピィ〜？」

コウモリは首をかしげ、わたしのいるシャボン玉にくつついて羽を休めた。

もしかしたら、天国まで連れてこられちゃったのかもしれない……と少しだけおびえたけれど、わたしはコウモリにうったえる。

「ねえっ、オバケさん！　わたしを元の世界にもどして！」

「ピ？」

「わたし、いま死んじゃったら困るの！　だって、まだ作文を提出してないんだもん！　先生に怒られちゃうよ！」

「キュピ。ピン？」

「それに、たおれてた友だちも心配だし！　クロムくんのところに、はやくもどらないと——」

「キュピ。ッピ！」

その時、クロムくんという言葉に反応したのか、コウモリは耳を立てた。うれしそうに飛び立ったコウモリは、パタパタと飛びまわり、わたしを閉じ込めているシャボン玉をポコンと蹴る。すると、シャボン玉の行き先が変わった。

「キュピ！　キュピ！」

「え？　なに？　元の世界に連れてってくれるの？」

「ピッピ〜！」

なにを言っているのかまったくわからない。それでも、コウモリはたのしそうに羽を動かし、どこかへわたしをみちびいているようだった。

シャボン玉はポヨポヨとはねて、星くずが散らばる川に落ちる。

空を流れる星の川。まるで天の川みたい。

七夕のお話には、天の川が出てくるけれど、もしかして、おり姫やひこ星も、近くにいたりするのかな？

でも、トウメイなシャボン玉の中にいるわたしは、どちらかと言うといっすんぼうし。

小さなおわんに入ったようなキモチで、どんぶらこつこと星の川をくだっていく。

「わあーっ、すごい！ この川から見る景色、すごーくきれい！」

「キュピー」

「わたし、本当に、天国に落ちやったのかなあ」

きらきらした景色に感動しながら、遠くまで目を向けてみる。

絵の具色の空。

空飛ぶニワトリ。

雲をおよぐペンギン。

星くずの川。

やっぱりここは、現実の世界ではない。

でも、ちょっとたのしい。

「さっきまでそれどころじゃなかったけど、わくわくしてきちゃった」

「キュピー〜」

「ねえ、オバケさん、天国ってすごくキレイなところだね！ それに、フシギで面白い！」

「ピ〜？」

「あつ、見て！ なにかの群れがこっちにくるよ。今度はなんだろう？」

わたしは元氣を取りもどし、次にやってくるものをたのしみにしながら、遠くを見た。

あわい絵の具で染まった空の向こう。

まばらに羽ばたく、黒い小さななにかの群れが、すごいスピードで飛びまわっている。

（さっき通りすぎた流れ星が、こつちにもどってきたのかな？）

そう思ったけれど、なんだか、様子がおかしい。

「……んん？ なにか、追いかけてこしてるみたい？」

少しずつ近づいてくるなにか。

わたしはじつと目をこらす。

その黒い群れは、先頭にいるだれかを追いかけているようだった。
大きな黒いツバサを広げて逃げているのは、どうぶつではなく、人のように見える。

「あれって——」

続きを言いかけた、その時。

とつぜん、「キュピー！」と白いコウモリがさげんだ。

ハツとして上を見てみれば、ちがう方向から、たくさんの黒いコウモリが、わたしたちに
向かって飛んできていた。

「あの子たち、あなたのお友だち？」

色ちがいの仲間かと思つて、たずねる。でも、白いコウモリはあたふたしている。

そうしていると、あつという間に黒いコウモリがわたしたちをとりかこむ。

黒いコウモリたちは、ブキミに「キキキ！」と笑つて、とがったツメでシャボン玉をひつか
いた。

「えつ、ちよつと！ そんなことしたら、われちやうよ！」

おどろいて声を上げたしゅんかん、パチン、とシャボン玉がはじける。

「わ、わああーっ!?」

「キュピー——」

シャボン玉がわれて、またもや空中に投げ出されたわたし。

体はぐんぐん急降下。

ものすごいスピードで落ちていき、白いコウモリともはぐれてしまう。

（どうしよう、このままじゃ、地面にぶつかっちゃう!?）

痛みをかくごして、ぎゅつと目を閉じた。

しかし、その時。

——ぼすつ！

だれかが、わたしの体をだきとめた。

「おい、だいじようぶか!? ふわふわ頭！」

「へ……」

近いキヨリから『ふわふわ頭』と呼ばれ、おそろおそろ目を開ける。

すると、目の前にいたのはクロムくんだった。

「クロムくんっ!？」

わたしは大きな声を発して、まばたきをくり返した。

これは、いったいどういう状況？

クロムくんは、背中に黒いツバサを生やしている。

しかも、空を飛んで、わたしをお姫さまだっこまでしている。

え？ クロムくん、なんで普通に空を飛んでるの!？」

ますますわけがわからなくなり、わたしはクロムくんにかえられたまま目を回した。

「えっ、ど、どうして、クロムくんまで天国に？ やつぱりあのオバケに、クロムくんもたまたまを食べられちゃった!? どうしよう、死んじゃだめだよ〜!」

「なにわけわかんないこと言ってるんだよ! ここは天国じゃない、『ユメミチ』の中だ!」

「へ？ ユメミチ?」

聞きなれない言葉に、ぼかんとするわたし。

けれど、すぐにクロムくんがなにかをケイカイして、大きなツバサを羽ばたかせる。

「チッ……説明はあとですから、とにかく逃げるぞ!」

「ひゃ!？」



ぐるんっ。

クロムくんはツバサを羽ばたかせて反対がわを向き、ものすごい速さで風を切った。鳥や雲を追いかけて、流れ星よりも速いスピードで、びゅんびゅんと景色が流れていく。わけもわからずクロムくんにしがみついたまま、夢みたいな世界の上空へと飛び立った。

第三話 だいきんわ きんきゅうじたい、発生！

いつもと変わらない日常のはずだった。

なのに、どこかで非日常に変わってしまった。

学校でオバケを見て。

空き教室でねむっているクロムくんの手にふれて。

そしたら、いつの間にか天国にいて——いまは、空を飛んでいる。

(なんで、こんなことに!?)

頭がこんがらがるわたしは、いまもおクロムくんにしがみついたままだった。

うしろを見てみれば、さつきの黒いコウモリの群れが、わたしたちを追いかけてきている。

「な、なんか、たくさんコウモリが追いかけてきてるんだけど！」

「知ってるよ！ だから逃げてるんだろ！」

「あのコウモリ、なに!？」

わたしは問いかける。

「アイツらはコウモリじゃない」

クロムくんは答えた。

「『コーモリン』っていう、夢の中だけにいるいきものだ。コウモリとはちがう」

「へ!？」

「いろんな種類のコーモリンがいるけど、アイツらは特に危ない種類なんだ。夢の中で人の幸せを食べて、悪夢を見せる、不幸のコーモリン——『フコーモリン』だから」

クロムくんは言いきる。「フコーモリン!？」とわたしがおどろく間にも、フコーモリンたちは、トゲトゲの泥だんごみたいなものを投げながら追いかけてくる。

「わあっ！ なんか投げてくるよ！ 危ない！」

「だいじょうぶ、ぜんぶよける」

「あ、あんな変なヤツらに、なんでクロムくんが狙われるの!」
「オレがアイツらの巣をこわしたからだよ。怒ってるんだろうな」

ため息をつき、クロムくんは空のてっぺんにある大きな雲をめざして、どんどん高く飛んでいく。

その雲はちよつとだけ不自然な、四角い形をしていた。

雲というより、ぬいぐるみにつめられているワタミたいだ。

「あの雲の中に突っ込むから、しつかりつかまつて」

耳元でささやかれ、ぎゅつと強くだき寄せられる。ついドキッとしてしまいながら、わたしは言われたとおり、うでに力を込めた。

その直後。ぼふんつ、と音をたて、わたしたちは柔らかな雲の中へ飛び込む。

雲の中は空洞になっていて、広かった。

クロムくんはふり返り、フコーモリンたちが追いかけてきていないことをたしかめると、ようやくホッと息をつく。

「ふう。どうにか逃げきったな」

「こ、ここには、入ってこないの?」

「そう。ここはほかのユメミチに続く出入り口だから、アイツらは入ってこれない」

「よくわかんないけど、それならよかった……」

安心して、胸をなでおろす。クロムくんもやわらかい表情だった。

やがて、ツバサを折りたたみ、ワタアメみたいな地面におりたクロムくん。

わたしはいつまでもお姫さまだっこをされたままで、だんだんはずかしくなり、小さな声で話しかける。

「あ、あの……ごめん、重たいよね……?」

「重くないよ。夢の中だから」

「へ? 夢?」

「そう。ここは夢の世界。現実とはちがう。ただのねむりの中だから、痛みも重みもあんまり感じないよ。ほら」

そう言つて、クロムくんはポイツとわたしを放り投げた。「ふぎやあ!」と変な声を出して投げ出されたわたしは、受け身を取ることもできず、地面に落っこちてしまう。……けれど、ぜんぜん痛くなかった。

ふかふかの地面は、ふうせんでできているみたいに弾力がある。ぽよんとはねて、痛みをぜ

んぜん感じない。

「ほんとだ、痛くない！ さわった感じはあるのに！ なにこれ、トランポリンみたい！」

「ほら、夢の中でほつぺをつねつても痛くないだろう？ あれと同じで、どんなに高いところから落ちて、痛みは感じないし、ケガもしないんだ」

「すごい！ おとくだね！」

「おとく？ ……まあ、おとくなのか？」

クロムくんは首をかしげている。わたしはふかふかの地面が面白くなってしまつて、意味もなくジャンプしたり、スキップしたりした。

たのしんでいるわたしに呆れつつ、クロムくんはあらためてたずねる。

「……それで？ お前は、なんでここにいるんだよ？」

「へ？」

「列車で来たんだろ？ どうやって乗車したんだ？ 普通、『ゆめみちぎつぷ』がないと、夢の世界にトリップできないはずなのに。車掌が通したのか？」

「列車？ 車掌？ トリップ？ なんのこと？」

「列車の車掌だよ。……お前、あれに乗ってきたんじゃないの？」

クロムくんは問いかけてくるけど、まったくピンとこない。

列車なんて、あつたつけ？

「うーん……シャボン玉には乗ったけど、列車には乗らなかつたと思うよ？ きつぷも持っていないし」

正直に答える。

クロムくんは、ますますげんな顔をした。

「おかしいな。車掌にあんないされたんじゃないのか？ どのタイミングでこの世界に入ってきたか、覚えてる？」

「それが、よくわからないの。空き教室でクロムくんがねむつてたから、心配して手を取つたら、この世界にいたというか」

「オレの手を？ ……いや、まさか」

クロムくんは考え込み、しばらくしてなにかの答えが頭に浮かんだようだった。

もしかして、わたし、なにかまずいことをしてしまつたのかも……？

少しだけ心配になつたその時、遠くから「プエー」という変な音が聞こえてきた。

どうぶつの鳴き声のような、音の外れたラッパのような。なんだか、マヌケな音だった。

「いまの、なに？」

「夢見列車の汽笛の音だ」

クロムくんが落ち着いた様子でそう言ったあと、また、「プエエ」と音が聞こえた。

さつきよりも音が近くなり、シュッポツ、シュッポツ、という音と混ざり合って、なにかが迫ってくる。

そして、列車は雲の中に入ってきた。

でも、その列車は、あきらかにヘンテコだった。

車両のひとつひとつが、かわいいヒツジの形をしている、とってもおかしい列車だったから。
「えええっ!？」

見たこともない列車に、わたしは目を丸くした。

「な、な、なにこれっ!？」

「列車だよ」

「列車なの!？」

思わずびつくりしてしまう。「プメエ! プメエ!」と、汽笛……いや、鳴き声?

よくわからないけれど、変な音を鳴らすヒツジの列車は、オモチャみたいな車輪を転がして

やってきた。

列車の走った場所は、キレイな虹になっていく。

空に大きな虹をかけた列車は、しばらくして、わたしたちの目の前で停車した。

ピンク、オレンジ、黄色、黄緑……色ちがいの四両へんせい。

先頭のヒツジ車両は頭になんとつを載せ、ふかふかと虹色のけむりを出していた。

わたしがぼかんとしていると、先頭車両のとびらが開き、中からだれか出てくる。

「ピビッ! 夢のもより駅、とうちやく! 車両のてんけん、開始!」

現れたのは、車掌の服を着てホイッスルをくわえた、二本足で歩くヒツジ。

ヒツジはポテポテと短い足で歩き、ひとつひとつ、車両をてんけんしていく。

「ヒツジが一匹、ヒツジが二匹、ヒツジが三匹、ヒツジが四匹! うん、ちゃんと四両へんせい

い! だれもおくれていませんね!」

ピッ、ピッ、ピッ。ホイッスルを吹き、テキパキと車両のてんけんをしたヒツジの車掌。

くるりとふり返った彼は、クロムくんの方を見て笑顔になった。

「お待ちせいたしました、クロさま! フコーモリン退治、おつかれさまです! みなさまの夢と現実をつなぐ、『夢見列車』がおむかえにあがりましたよ——つて、おや?」

クロムくんは話しかけながら、となりのわたしに気づいたヒツジは、キョトンとまばたきをする。

そして、すぐに明るく笑った。

「おやおやおや！」

うれしそうな彼は、短い足でポテポテとこちらへ近寄ってくる。

わたしの目の前までやってくると、両手をバンザイさせながらぴよんぴよんはねた。

「これはこれは、あたらしいお客さまではないですか！　なんとめずらしい！　はじめまして、お客さま！」

「こ、こんにちは……？」

「メヘー！　ぼくは、この夢見列車の車掌！　長らくユメミチを走ってきましたが、

クロさま以外のお客さまを見たのは、はじめてです〜！」

ヒツジはクロムくんを見て、「お客さまがいるなら先に言っておいてくださいよ、クロさま〜！」とモコモコのほっぺをふくらませる。

「どうやら『クロさま』というのは、クロムくんのことらしい。

クロムくんは、ぬいぐるみみたいな大きさのヒツジをだっこして、わたしに紹介した。

「このヒツジは、夢の中につながる列車を管理する車掌さん。こう見えてえらいヒツジだ」

「メヘヘー。えらいだなんて、とんでもない。いつもこの夢の世界を守ってくださるクロさまの方が、とつてもえらいです！　すごいです！」

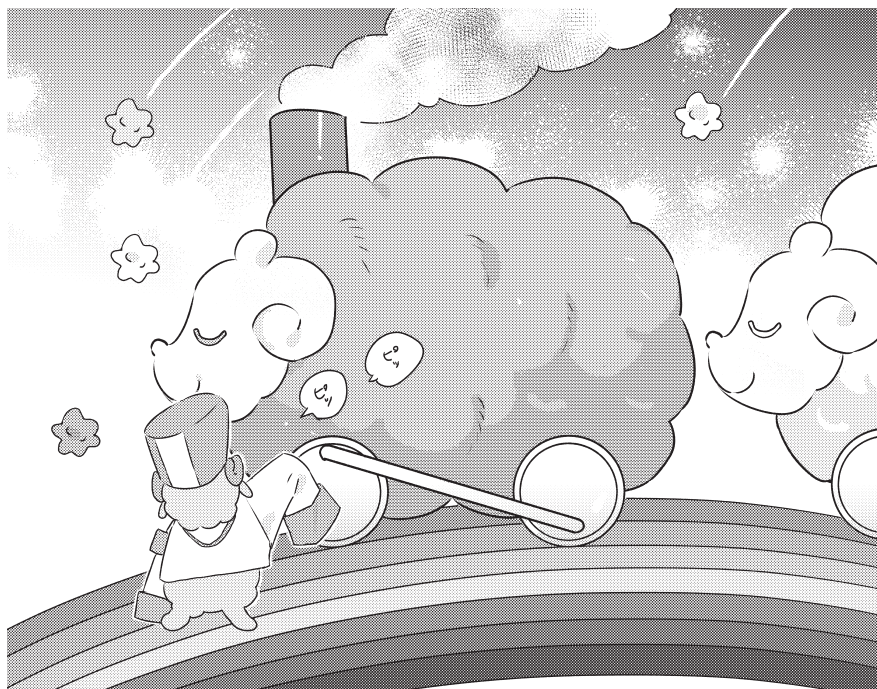
「オレは大したことではない」

車掌さんのほめ言葉に、クロムくんは照れくさそうな顔をした。でも、わたしは首をかしげてばかりだ。

クロムくんが夢の世界を守ってるって、どういうことだろう？

いろんなことが起こりすぎて、頭が追いつかない。

ハテナでいっぱいなのわたしをさしおいて、クロムくんは列車に乗り込み、だっこしていたヒツジをおろす。



そして、手まねいた。

「ほら、乗れよ。ふわふわ頭」

呼びかけられた時、車掌さんは顔を上げる。

「ふわふわ頭……？」

車掌さんは、わたしのあだ名をもう一度くり返すと、ハッとした顔でわたしを見た。

「ま、まさか、あなたは！『伝説のふわふわ頭』さま!？」

「へ？」

「クロさまが言っていたのです！『うちのクラスには、ものすごくノータンキで、うつかり屋さんな、伝説のふわふわ頭がいる』と！」

思いがけないばかり話に、わたしはすかさずクロムくんの方を見る。

クロムくんはあsettったような顔でサッと目をそらした。

一方、車掌さんはひとみをキラキラさせ、あこがれのまなざしでわたしを見る。

「メエー！まさか本物に会えるとは！本当にふわふわ頭なのですわね！わあ〜！」

「えつと……。あなたの方が、体を毛におおわれて、ふわふわに見えるんだけど」

「そうです、ぼくたちヒツジもふわふわです！だから、ふわふわが大好き！ふわふわがい

ちばんかわいい！つまり、伝説のふわふわ頭さまも、とつてもとつてもかわいいのです！」

「か、かわいい……!？」

急にほめられ、わたしは胸をおどらせた。

かわいいなんて言われたら、ちよつぴり調子にのつてしまう。

じまんのふわふわ天然パーマ。かがみを見る時のお気に入り。

わたしは髪をふわつとかき上げ、くるんと回つて、モデルポーズ。

「ふふん！そうです！実はわたしが、伝説のふわふわ頭なのです！」

「わあ〜！すてき〜！あとでサインください〜！」

「えへへ！もちろん！」

「やれやれ……」

すつかりスター気分のわたしに、ため息をつくクロムくん。

「もりあがつてるみたいだけど、そろそろしゅっぱつする時間なんじゃないのか？」

口をさんだ彼は、車掌さんの背中をツンツンとつついた。

「おつと、大変です！急いでしゅっぱつしたしめんど！」

車掌さんは大あわてで、うんてん席へもどつていく。

やがて、「プメエ」というマヌケな汽笛の音が、ひびきわたった。

『さあさあ、席におすわりください、みなさま！ まもなくしゅっぱついたしますよ！』

列車に取りつけられたスピーカーから、車掌さんの声がする。

クロムくんは列車の奥に進んで、羊毛でできたふわふわのイスに座った。

わたしも彼についていき、となりに並んでこしをおろす。

『それでは！ 夢と現実をつなぐ、夢見列車、しゅっぱつしんこう！』

車掌さんがせんげんして、ガタン、ゴトン——走り出した夢見列車。

窓の外を見ると、列車は空に浮いていた。

ゆつくりと景色が流れていく。

雲を抜けて、虹をかけて、空の上を走っている。

「わあつ、すごい！ 空飛ぶ列車だ！ ねえ、これからどこに向かうの？」

「現実にもどるんだよ。夢から覚める」

「えー、もう終わり？ なんだあ、ざんねん」

わたしはくちびるをトガらせた。

窓の向こうに流れる景色は、やっぱりキレイで、ヘンテコで、見たこともないフシギなもの

ばかりだ。

「……ねえ、クロムくん。ここつて、クロムくんが見てる夢の中なの？」

ちよつぱり声を小さくして、わたしはたずねた。

クロムくんは少しだまったあと、「ちがうよ」と答えた。

「ここは、オレの夢の中じゃない。別のだれかの夢の中だ」

「ええ？ どういうこと？」

「オレは、ねむっている間、ほかの人の夢の中に入ることができるんだよ」

クロムくんは落ちついた声で説明した。

わたしは「えーっ!?」とおどろく。

「ほかの人の夢に入ると、そんなことできるの!? なんで!?」

「それは、オレのご先祖さまが『バク』だから」

「バク!? バクつて——」

わたしは目をまんまるにしたあと、また、声を小さくした。

「——なに？」

「そう言うと思った」

真顔でたずねたわたしに、クロムくんはあきれ顔。

そして、説明をはじめ。

「バクっていうのは、かんとんに言うのと、『夢を食べるオバケ』だよ」

「オバケ!？」

「そう。オレのご先祖さまは、大昔、バクと結婚したんだって。だからオレも、バクの血を受けついでて、ねむると他人の夢の中に入ることができるんだ。それを『夢トリップ』って呼んでる」

「ええ〜!?　じゃあ、クロムくんって、実はオバケだったの!?　すごい!　オバケ、はじめて見た!　あくしゅして!」

「いや、オバケの血がちよつと混じってるだけだから……っていうか、やつば変なやつだよ、お前」

あくしゅをしたがるわたしを見つめ、クロムくんは小さく笑った。

「普通、オバケのこと怖がるだろ」

ほほえみながら言うクロムくんに、わたしは「えー、ぜんぜん怖くないよ」と首をふる。「だって、クロムくんは、オバケの中でもいいオバケでしょ?」

「……まあ、悪いオバケでは、ない」

「ほらね!　だったら、ぜんぜん怖くない!　それより、バクって夢を食べるんだよね?　どんな味がするの?　甘い?　しょっぱい?　おいしくない味もある?」

興味しんしんに、いろんな質問をすると、クロムくんはなんとかまばたきをした。

彼は指でほつぺたをかき、「やつば、変なやつだな」とつぶやいて、答える。

「さんねんだけど、オレはバクの血がちよつとしか流れてないから、夢を食べることはできないよ。オレができるのは、悪夢を追い払うことだけ」

「悪夢を追い払う?」

「夢の中で、フコーモリンの巣をこわしたって言っただろ?　アイツらは、悪い夢の原因になる存在なんだ。巣を放っておくと、どんどん大きくなって、悪夢しか見られなくなる。だから、オレはフコーモリンに巣を作られた人たちの夢の中に入って、アイツらを追い払ってるんだよ」

クロムくんは説明したあと、「まあ、信じられないだろうけど」と少しさびしそうな顔をした。

わたしは「信じるよ!」と前のめりになる。

「クロムくん、わたしのこと助けてくれたもん！ だから信じる！」

「でも、夢から覚めたらわすれるじゃん。オレとここで会ったことも、助けられたことも」

「わ、わすれないよ！」

「わすれるって。だって、お前、昨日のこと覚えてないだろ？」

クロムくんの目がわたしを見る。

「昨日……？」

なんのことかわからずに首をかしげると、クロムくんは「ほら」と、またさびしそうな顔を

した。
「夢の中でぎこたなんて、覚えてない。なにも」

目をそらすクロムくん。

その時、わたしの頭の中に、昨日見た夢のキオクがぼんやりと浮かぶ。

なにか怖いものに追いかけて、こつそりとかくれながら、泣いているわたし。

だけど、そこにだれかがやってきて、怖いものを追い払ってくれた。

『だいじょうぶ。オレが、お前を守るよ』

伸ばされた手をにぎると、あたたかかった。

……でも、あれって、だれだったわけ？

「ねえ、クロムくん——」

言いかけた、その時。

とつぜん、「メエエエー！」とヒツジ列車がひめいを上げた。

同時に、列車がガタンツ、と横に大きくゆれる。

「わあっ!？」

「な、なんだ!？」

ものすごいゆれを感じて、クロムくんが真っ先にわたしを支える。「じしん!？」とおびえるわたしに、「空の上なのに、じしんがくるわけないだろ！」とクロムくんが返したあと、スピーカーから車掌さんの声が聞こえた。

『メエデー！ メエデー！ メエデー！ きんきゆうじたいですー!』

車掌さんは大あわてで、スピーカーにさげんでいる。

『前方に、フコーモリンの群れがしゅつげん！ 列車がこうげきを受けていますー！ にげま

すので、この先、とつてもゆれます！ しつかりとおつかまりください！』

スピーカーからそんな声が聞こえたしゅんかん、パリーンツ、と音がした。

列車の窓がわれたみたいだった。

われた窓から入ってきたのは、たくさん黒いコウモリたち。

ケタケタとブキミに笑い、わたしたちの方に向かってくる。

「えっ!? あれって、まさかフコーモリン!?」

「まずい！」

「きゃ！」

クロムくんは、わたしの手をぎゅつとにぎった。しかし、列車がナナメに大きくかたむいたせいで、二人の手はすぐにはなれた。

そして、わたしの体は、われた窓の外へ投げ出された。

「う、うわーっ！」

「ふわふわ頭！」

クロムくんはわたしを追いかけるようにとする。

でも、フコーモリンたちにジャマされて、わたしを助けることができない。

「おい、ジャマすんな！」

『メエデー！ メエデー！ メエデー！

ついらくのおそれがあるため、列車は、これより不時着いたしますっ！』

「くそっ……！ ふわふわ頭ーっ！」

大さわぎになっている列車が、どんどん遠く、はなれていく。

フコーモリンの群れにおそわれたクロムくんたちが遠のき、ついに雲にかくれて見えなくなったところ。

わたしは、巨大な闇に包まれている、どれかの悪夢の中へ、まっ逆さまに落ちた。



第二章 灰色の森と女王さま

第四話 ハラペコの仲間！

——ぼち。

目を開けると、見なれた教室の中だった。

一年三組。わたしのクラス。

変なコウモリも、ヒツジの列車も、クロムくんも見当たらない。

ごくごくふつうの、いつもの教室。

「……あれ？ わたし、さつき、列車から落とされたはずなのに……おかしいな……」

「ユニコちゃん」

「ほわっ!？」

ぼんやりとしていた時、いきなり横から話しかけられて、わたしの肩がびくつとはねる。

「ねえ、ユニコちゃん。作文、書き終わった？」

話しかけてきたのは、親友のミーちゃんだった。

ミーちゃんは、かわいいふたつむすびの髪をゆらして、わたしの机を見る。

「あれえ？ まだ真つ白だよ」

「あ……ええと、いねむりしてたみたいで」

「えー？ いねむりなんて、いけないんだ。宿題もしてないし、ユニコちゃんって、本当にダ

メダメだね」

くすくす。ミーちゃんはイヤなことを言って笑う。

なんだか、おかしい。

ふだんのミーちゃんは、こんなふうにいじわるなことなんて言わない。

「ミーちゃん……?」

おそろおそろ呼びかける。

すると、ミーちゃんの目が赤くなって、笑っている口もとに、ギザギザとトガったキバが生えてきた。

「ひゃあ!？」

立ち読みサンプル はここまで

おどろいて席をはなれたわたしは、いきおいあまつて尻もちをつく。
様子のおかしいミーちゃんの背中には、悪魔みたいなツバサまで生えてくる。

「いーけないんだ、いけないんだ。せーんせいに、言ってやろ」

ミーちゃんはどうしたいながら、一歩ずつわたしの方へ近づいてきた。

わたしは「来ないで！」とさけんで、作文用紙を持ったまま教室を飛び出した。

「どうしよう、友だちが、おかしくなっちゃった……！」

学校のろうかを走っていく。

だけど、見慣れているはずのろうかも、どこか様子がおかしい。

カベは汚れ、ヒビがたくさん入って、いまにもこわれそうだ。クモの巣がはって、窓もわれていて、木の枝や石ころが、いろんなところに転がっていた。

「なんで、こんなにボロボロなの!？」

学校が、まるでオバケやしきみたいになっている。ろうかやグラウンドにも、背中にツバサを生やしたみんなが、さまよっているのが見えた。

くすくす、くすくす。

悪魔みたいにブキミな声で、うたいながら迫ってくる。

「いーけないんだ、いけないんだ」

「ユニコちゃん、いけない子」

「こつちにおいで」

「おいでおいで」

わたしはなんだか不安になって、「こんなの変だよ！」とさけんだ。

そのしゅんかん、学校みんなが、たくさんのコウモリの群れに変わった。

「キキキッ！」

「ケケケッ！」

黒いコウモリたちは、口のはじっこを三日月みたいに持ち上げて笑っている。
多分あれが、クロムくんの言っていた『フコーモリン』なのだろう。

ギザギザとトガった歯が、わたしを噛もうとしているように見える。

まちがいなく、悪いヤツだ！

「に、逃げなげや！」

わたしは大急ぎでろうかを走った。

ボロボロのろうかは、とちゅうからキリのような黒いモヤモヤにつつまれて、奥の方がよく